ロ 9
3583
1

門口9
境3583
巻1
口9
3583
1-3

家内用心集

洛陽　柳枝軒開板

此書ハ仙臺府下。頓宮氏老人のあつめ置し也。農工商の三家。平生座右ハ置く。家業ハいとなみ。ぶるべ熟考べし。壮年のハより早く立身の心ざし。紙をげ。晝夜家業ハ怠べ。精誠を抽く。家法ハ此書をもつて師範として。ぶる勤るべし。家内繁昌。子孫永久ハ甚而て何事とよびんと願ハ。

家内用心集

家内用心集叙

はるく世間をゆき。家内をもとめ。家業をよく勤く。世界のまどりあきなひ。又家内のはたらあり。世間の変よりも人あり。内外とも勤惰。日々にたゆまざる人有。内外共ともよく勤く。人も教ゆる人も。ひんぷん貧賤ハ常にくるしむ人あり。富貴ふして常にくるしむ人あり。是皆心の

昭和九年九月二八日購求

用捨よろしからざるものなり。每くに
ふい燧の火おこすこと。用ゐ
の人をと調和して。甘美香しきを煖め。
武い金銀銅鉄を。初めきたして器をうせば。
天下の寶となる。みあく用ゐない火笑めく。
天下国家の財をも燒失ふ。是皆同じ火
なれども。用ゐ方のきゆへ也。一心の本虛靈よ
しうゆ。物をもてしたがひてうごく。

故に用捨あるべし。五常をみだし家業
を忘れ。富貴をもとめくも其の元をうしなふ。
勤めるべき。はをもとめ。家を滅し身
をも失ふ。是心の用ゐ方を思はざる也。能くを
よく心に用ゐるべい。家門もつまく世間
の交よく。貧賤ありて常に安楽あり。
まことの聖人の教ゆ。こころを
正くとなれば。身安さまり。分限安さまれば。

家斎家々の人々。国も治まり。世も治まり。天下平らかなりと。かくれおくいふて。色々心の数数万巻。聖賢の書籍有れいへども。文々句々あるいは廣く。たとへば和らぐれば。文なくして。あり。常れ人々ともろともいふ法なく。たとへ法くとみくも通ずど。もろ〳〵いかく益もとれしまたとてもろ〳〵人間生れなが。日用人ぬ

くらもろ〳〵ひとつ。ひとつ。ひとつ。

なるべき事やせ。日用ものを乃用拍乃ようあるを法とおもふ。家四用心集と名付て。小家のをろかなれども人のあるべきものを

仙臺府下
寂照軒　頓宮咲月謹書

家内用心集巻上目録

○夫婦の事
○男女に別ある用ゐる事
○家を治める事
○金銀の法ひ用ゐる事
○子弟に教へ用ゐる事
○兄弟中睦まじく
○家人はたらい用ゐる事

○言語の用心事

○火乃用心事

○出火時の用心事

○病の用心事

○看病人に用心事

○盗人乃用心事

○人に用心事

○あるべの用心事

○客人の用心事

○朋友に中用心事

○酒宴乃用心事

○舅又母舅姑の用心事

○養子婿乃用心事

○主人に用心事

○手代等人の用心事

○乳中乃用心事

巻中目録

○武士用心之事
○若人用心之事
○職人用心之事
○商人用心之事
○百姓苦楽用心之事

巻下目録

○十五ヶ条之事　毎日家人へ申せ聞べし

家内用心集巻上

○夫婦用心之事

そもそも男は湯わかして天と象ばかを守て功を専に
なすべし。女は炊ぎして地と象ば。静にして門をおさめべし。ひと
のおこなひ。ものいひ。和合をもとめべし。子孫を人より栄べし。さればこそ女は
男より長ずる者にて人の間に。後生をもて。万の仏のこころの
多し。ゆゑよし。凡て大切のるをば知せぬるものなり。孝行
乃仕事。家業の相をもて。ちゑふかくして。貴賤
も教べし。毒をもて。夫を天のごとく。主人を人のごとく。

教ひ性をゆるすも私なく、まことにうけ志ぶかいてゆるすべし。
中ごろ家の始末をわすれて、ちくと懈怠。家の内和合して。
俳諧も不義なる人をいましめをせざれば、其花乃道より
かるいて、子孫も久しく繁栄をべし。

○男女者別用心之事

座賢のをしへ、男女席を同せざるべきいとして。幼少の
時より、是を強教ゆへ成長の後も男女い別を事紙
知て、不義ぬりのいなをいつ。人をも長ずしていに人君
より、その誡をつくけを教ゆ。常い内編。後家仮法

の座をしても。男女いたがく座をとゆ。士町人と沈牙をみざ
さんゆへ。不義ぬるをいつき。罪をうく老稼也といふ。
御ゆふ法也。是をゆるされ。毎年不義如罪人
ける多く有る。をそくをつきる也。故ゆせをいい家乃
門ぐるも。是事をうしなひ。出郷ゆるもの也。まゝ母い名
別。地で男女同席に並び居べ。男女二人どりい。
少の内を一座をゆるもの也。親子兄弟家人い名
別。をかの人ゆ。男女をうしに物をゆべ。能和ふも
不義ゆる戯をせゞ。地ゆて我より年のまゝ女をべ。
母や姉とゆ。年のをゆる女をべ。姉や妹ゆ。女も

又男とかくれおぼく親兄弟のめく砂くらいて情ちがをの
ぼく紙屋呼くめ和くそ又澤く独居の会地くべ用を
閉て一切用を考えれば。和て不澤と包る。二俵の袋
ぬるをつよく紙ぐべ。若情まべて。不義をら入
くれいそ分い現在富せと言れて。刑罰よちづむの
なれば。親兄まぐ彩ませ。恵名をなぐ祈とる。
てこれよるる大罪いなく。情べき外一也

○家持用心之事

家持ぬていず一我身を正く扶。親子兄弟妻妾乃
中。むまくをこ。ぷ縁と在愛の乃と為る。奴人と雇て。
つふ召事と為こ。恵ると嫌て。家業ふ怠ば。倹約を
守り。家の風儀ときびくちく。男女ら別みるをよく
をこ。毎日家人にそれの所作といい付。屋宅。器物。
拭き乃破損とつよく修理し。衣食居い。人用外一乃物
ゑれば。飯米。炭薪。味噌。醤油乃をよく貯ゑべ。ぬて
福い。利を多く求るによりて。殺るゑれば。利を求んより。
家業怠惰よくはもく。金銀と撰よけるさぬい。
福もなく。福禄いをのばくる。恵ると嫌ものを。元て婦人と
小人の間云後云紙のらぬ。べくべの。分れと大切なる

事わざを亟わる老人おのづから学問紙をよく用べし。我いま十分の
ほうこうをなすべきもの多きものなり。
地ぢ家をもとめていろのきのよく勤くるをもとと奥
さんこの紙をもとべし。紙の故に紙却て親の讓を失ふ事い。
亟てあるべし。親のはからひをもとと奥しのふ公
をおもく我もこの新規よ。親の奥しのふ行よ。一進已奥
してもて。一人おれ人なるべ。勤い天のたもとそ天い畫
夜迎てく止可ず。怠い地乃たもとそ地い静にして万お
をすべ。勤と怠といこれ天地よもとづけ也。却て親孝
朋友ないおく兼倹もとおつくもの。おのく怠とおつくとべ。

只家のたもを正くもつく家内和睦をもといべ子孫もながく続ま。
家も繁栄もとべ地ぢ家の空表い却起のつよもと。逆さた
あるべ。者ち書ん多くも勤くるべ。何ぞ天のおかして。
いぶんもとべ

○金銀遣捨用心之事

地ぢ家の空ないもの無るも只財の用やうにもとる
ものしいべ。もとそ行ものもの必ずよ乃くもとを行てもとべ
しばをもとべしい風雅もとめて。無益の費ぶ多く
ひのくもとべ。釈を書るもとべ。若し事ともはら

がてこれを施し恵むべし。礼義ひがごとなば事乃はたらきなくして貧苦の禍を子孫に伝ふる事疑なし。よく考て常に益ある事を為べし。倹約をもつぱらとすべし。無益の費を省く。勤と倹約との二つを鉄金衣数乃宝と為て家居に如ずして我身をおもはるべし。物ごとに慎べし。無益の事を為べし。品数を尽さず本と都ごとに財を利むるなり。然て一年の納方紙ぶくろ幾ばくと用て一ヶ月と除しをけば三年に一年分残る。これ古の法なり。不時の損失あるとも。家の法ゆゑ事なし。古歌

貧の市代に八年の法の七年の早あるとも。難義に及ばざるはひとへに一備の一字なり。家とはゆゑなく無分さへ不足とそのうちなげくなり。利足を添て添ることなれば。家を失ふの必ずなり。無分乃内の入用を借ることなば法事倹約をもつぱらにすべし。よく添ることなく。これ金銀を用る第一也。必ゆゑなき物をつくべし

○子孫教訓心之事

老て後人となる。幼稚なる事。常に奢と自慢なる事と。絶いまだ朝夕の食と衣服おろそかにして。謙和をわ

用ゐる。これ幼稚より倹約を教ふる道也。ぜいたくに流れ潮て。おのづからはぶくべし。冠婚とあるとも。衣服をかざり。地位を誇ふそぶる。なるべし。長ずるにおよぶ。必家と共に和也。只常に儉りなく。住をかなしてよく在貧の乏紙習也。儉りて親兄弟より。なほ貧なる中にて教ふる。亦友と去よく。富る親友と求て。そなたの所へ。その貧なる兄弟へ。あたへ也

○兄弟中用心之事

兄弟とは。元来父母の肉を分る枝なれば。たとへば。手の指のごとくにて。見ぐるしきにて。捨べき事也。家紙より。弟幼稚にして。兄い弟を嫌ふ。教。弟い兄を敬て。もてなすべし。まづ中よく。睦るべきは。兄弟い他人のけじめとなるべし。財をあるとしれ。とみどころあるべし。富貴にして。貧なる也。兄弟いわれて。親の分ゆえを。忘れて。法分睦く。寄合。そなたに。他人に。恵て。何のとがもなく。ほとんどのしるまきに。みくびるべし。無礼をあらべきなれば。天地のあるかぎり。まもれ。人ぞ。第一也

○家人召使用心之事

家人をいましめうらして礼義を正しくしてばゆるせ
られば罪とがめて科をとらんの也。なまとるのいつる人を
そのまことをわすれば偽角につきてやがてこれをあやぶ
まんべし。物人才無学にして利口なる者多い信ずべからず
。人をあざむきて大きなる禍をまねくの也。我心のみよく
るしいろうたおすまり悪しくべし。必ずもくい奢ゆとくして。
家風をみだすことわざ也。只常によく教てはたらかべし。罪
なくても。大きふ悪みくらべ必恨を残して都て禍と
なわ也。才智なくとも。正質なる者をいたわりて
はたらかべし。能教てもいたずらなるものをいとくいて後

出すべきこの也

○言語用心之事

口は吾身の出る門なれば。朝夕第一よ。慎べき関所也。強る
事。益もなき偽をまうして。後言悪言をいひ。或いつる言葉
口をとる。是禍の門なり。舌は是禍の根なり。是皆なの
何也。人をくれ林屋敷乃乃紙類をくへ。教分を傍る
こと。天下国家をとりあつかう。乃紙をいひ。是紙懲し。
是を引入るゆえ。人をいたい教ること。口は則吉祥の門なり。
舌は是万吉乃根なり。能紙よく無くく。常よ慎乃

才一ことゝぶき有也

○火之用心之事

火い。燒元うん事紙ゝいて。ろくいろう。竈のまりう紙。きれいふてゝ。ゝとそも紙燭。たゞこの火の影。家を付ゞ。小火ゝうたゝ。おやまりて。都る所い火消ゝ及ゝたい。業る方れ家財を元ゝて。他人の疑ゝ。國所の騷動。うのうやゝあげてゝ。おゞゝゝゝ。ゝ考て。何ゝも大切ゝ用ゝとゝゝきるゝ也。ゝ。毎日業ゝ。ゝ曲ゝ火の用心をゝゝ。ゝ付ゝゝゝゝ也。勿論。竈ゝゝゝ。ゝ病ゝゝゝゝゝ。

汲入ゝ。ゝをゝゝ。ゝ。ゝ。

添と。戸口の四をば。をりて。をべし。戸溝と。敷をとべ。戸のなりふ。そこに押付入べし。桟よりかるはいこ。二人よりとへ。いくらじれてあげおくきわ也。扨入仕舞て。戸をそこんと。ちりかぶ。蠟燭とりて。二階。三ケ所も。燭台にて。見まく。土戸をろれば。かく。表間。蔵穴かりても。四へ火氣入ぬ。扨也。これい。牧炭のある。る也。又宅義よい入仕舞。くに。奉こと。板ろ紙。てよて。濡紙をよくかけて。そこに。砂を。一尺。塗もりけ。上にあ四又升小桶に入置て。よ。ぬ。屋。きを。立のべ。見張と。桟と。酒瓶と。紙を。おく。近くに。ひく。居。る。金。法り。仕舞小。

法。長。見張。とて。とた。紙を。おて。宅義の上。紙。掛。べ。土。義。とべ。戸。あと。家。近く。火。事。のあ。ろ。方。火。と。消。て。ろけ。流。かいたのなき。付。静。に。戸。を。開。べ。たるあく。早く。開。をべ。門。に。ぬ。ろ。て。ろ。火。事。ふ。かの。風。あ。て。必。焼。あ。るもの也。ろ。てはる。ものをべ。ぬ。く。に。関。を。置。て。よ。又。端。舎。濡。戸。物。のべ。ひ。花。火。の。付。物。をべ。義。の。外。に。置。て。もよ。さて。まれ。ぬ。よ。て。く。の。者。あ。る。も。見。知。ざる。人。をべ。屋。敷。乃。上。ふ。かの。あ。ぬ。に。て。べ。ぬ。を。見。仕。舞。ふ。は。慥。に。知。る。者。べ。ぬ。に。て。仕。舞。べ。きもの也。扨。て。ろ。ものをば。常。に。家。内。の。老。ぬ。に。ぬ。を。置。べ。きもの也。

むとも火鉢ハ出さぬこと。入用の大概教をくも

一仏神先祖牌　一記録代々帳　一無尽家業

一大小差長刀類　一衣服所具類　一家財戸障子

○病用心之事

常に無病の人なれ共。異気を受てとかくとくべし。

ゆゑ病でもなく気うるるとも。ひまをとれば所より

風をひき。さてわるい。異気にあたり。湯をうるるの

きうの也。扨又酒をもさぬ。色を慎み。物つゝく記録会

をもさぬ。嗜ぬものとひろくて。毒用の分別と除べし

病の変ずる中色。もろ〳〵紙大会するとも。ものに堪て人

おろく病る人わりこれい嫌く取きるにて。動て毒を生

なり。ゆゑ我得会。好物と多り有といひて。事仕と会する

ゆへ。病をうて。毒病と成。或い非業の死と乃ぶ。動て

思て。我分をこゝろ知いるの也。我一人こゝろむのみ。

毒を釈尺才と動るまで。大勢の欲きかゞ〳〵。家紙

ゆく年で。ものひ物をたく。場所をたべ。客を結ん。

毒病安神と成。すぐくむの楽をうべきりの也

○看病人用心之事

そし病人いとうあるひの体にして。ひく若根功徳と成。
又粉薬大罪とぬりの也。ぞ人術わをたうて。先合物の
ぬりをとぬみあつとあいざるこ。徒すしとすぬざるこ成考
て。用る事才一なり。薬と大小便膿血痰等成。じとこ云いて。
賜むでこしに。只差起ろ仏。て看病といこと。何ぞ物と
もこいんろこ云いてすぐこ。だことりのお薬。ぬお意を
よく考て差でゆうと大切ぬて。只病人ろ仏。そろ成。
若ゆうこうるゆうにをめて。能初ふも。物差のなこゆうに。
病人ぬ対も脈をたゆ。ゆうにとぞ。病人ぬ言ふあるぬ人
をばかこうの在へ入ぬこ。ぞ病の人こうとも。言う

あいるぬ人事るぬいゆ。言ぬあくぬりの也。病言くぬて。醫者
も辞退。薬法人こも。法ぬこ云ぐ。必薬成用るるお
こ。病病ぬあいざる薬いゆ。病こ自こいて。却てこ新しむゆ。
正今も人ざるぬ初也。只仏ちづふ。本仏して作ることて第一也。
知ゆを云いて。ちぬて薬を用る人。ぬ本ぬ考也。言言必の
也るりかくぬざこ。結結して看病とこしぬ。若根功徳成。
こしよそざこ云いぬ。大きこる罪こぬるるしぬ。法を作ぬ仏
を扱て。大若根こぬるこして看病とべきこの也

○盗人用心之事

常ゝ門戸のたまりい物縁鍵ゞ紙毎夜元仕ゑ也。
扨て常ゝ人れ出入ゞ紙付る事肝要也。む雨風の節
憂ゑ。祝義。振舞。祭礼作ゞ多。扨て家内の者常外
ゝゝ。亭主ゞ代別ゞ紙つけ。度ゞ夜まいりを
べし。皆外ゝれいお魚のゝゝと側ゞ重べし。毎人ゝゝ
ゝも。本方ゞゞゞれ孫を重べし。茶中裏名人ゆく
ゆいゞゝと拵ゞ物げゞ紙つけて入べし。茶中
の用ゞゝは半ゞ別してゝれゝの也。間毎ゞ常ゞ焼石
ゞ端物を重べし。ゝ方ゞゝゝて外家ゝい。間毎ゞ
拵ゞ本紙重ゞゝゝゝの方毎ゞ。お番ゞ拵ゞ能也。

ゝ物ゞゞ紙ゝ。ゆゞゞゞ方ゞゝまりて。ゝ紙付べき也

○人ニ用心之事

世ゝ流ふゝ。ゝい盗人。ゝい焼元ゞゝゝ。作人ゝも拵て。
ゆゞゞゞ

き者をば。必ゆるすべからず。別僕人請に入るいかゝ
立ざるべからず。なまなかるべき代官いかの事也。今日
さうんなれども。一度よ換あれば。れいれいしくせわる者もいの間
ふ乱をなる。勢で物の変いけりがたくなれて
弁知く。惜よ。仕ひ物なるをいかゝなるべきあ
なりの人の名ゞ。変でやとくれかれたるけもべ也

○客有時亭を用心之事

第一掃除を物りげまて。寄番ゝ上と。家の内。よ外待。
閑所よ。ものまで。蝶の巣なるに中に。字紙なべ。拾あ

ゝ。ものの上下れ。給仕をする者ふ。あの上下れ。給仕。脇の
ゝ。方式教ゆ。配膳の事。脇の内きれ。たゝの事れ。
客のなり。帯ゝ。人帯て出ゝ。ゝ。脇の内。神ゝ中ゝと
まゝ。ゝ。度ゝ。客を。御客を。演べ。勢で。一膳の物。
ゝ。ゝを付く。客の事ふ。お意をゝ中ゝ。物毎結梅
るゝ。ゝ中ゝ。ゝを付べ。物を進る事。三度まで。
礼義也。三度ゝ。ゝて。酒ゝ。ゝ。ゝ。客の
ある四ゝ。ゝ中ゝ。脇ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝふ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

むさくるしのぶくるしくゆかしれて。悪く臭紙二三枚重ね。角こそ。二打ぢう。情中する物也。これい物のこぶれる時。早く掃うこと也。扇子をば。腰に持てをるもの也。老人子人へ無ろ物ばかりのこぶしをもたるホよとみてきわをば。扇子もんの也。常に心安き客ぬも。無ろ奥ろ。家内の者ども。慎べきこと也。むし所方の振舞作ハ八ツ時ハ昼を出をる。考反ばかりをふようしていろり

○客人用心之事

假令朝夕の飯飯。ぬどしかて人によりてハ。朝より。ぬどけて。用事ばかりまくは仕舞。さて方ゝ。乃ち。用事あるべし。その心ばへてこと。行べし。無き方へ行ってを。相違て。常れ和をば。そろくて行ば。礼義也。扨先の亭主。結ところ乃ち。ぬどと。考ども。ぬて。行るハ。ぬて。これなる事をもてざるゆく也。我ものへ人を呼て。ゆくた時の。違てさて。紙をしてぬて。ぬくく行べし。ぬくく行べしハ。路次入より。家お料理。ぬ。それくに。紙をもてをもべし。扨大体の振舞。作べ。ぬれ。ぬよ。よく。ぬべ。ぬとまゝ客合ハ時宜にして。ぬて。ぬて。ぬて。

去なんぞ。これもおのれ誘ひ来たりぬる方とは。如何ぞ拂除せざる。尤一種の物ふも家内分て。よくあるの者ならんか。穿鑿して信ぜざる。麁忽なんと云へ。而して生て来る用いおろそかにも無て。却て服玩ばかりの物のごとく用ひ人を結人乃麦をもて人うなぐらいているとそらんず事い。漸く和らぐ信法也げや一種のありても。減のよれを。ふるまいんとゝ云へばやれ変れ家乃毒なる和いなり。却て此すると毒なるげんを家をつけくるゝ遠方をもべばゆる使をわるゆるしパッ

若ち紛ぐ。これ世間の表とるにいゆ。中一ときべきゆく

○朋友用心之事

人い若悪の友により事うれいぬ。そ仮ることを信ずるひくをえてそ。友とすべく人のようあるをもとんとするうはその去れ友とうるあれば。漸く有ゝき事うり。

悪ごて親ことうくゆわぐ。礼義とあつくべくだもるけまいぬとうくゆ易く。自然と云れよゆ。紛素もうぐゆるゆゆ。然ゆくうりのゆ。ゆ月の衰ゆ乃。面中れつまぐいたくよそ。わ云にうく一種ゆそ。

より合たがひて身のうち。私に用ゐなど偽りをそなへ
あるべからず。身も苦しうして益あれば是はてのあるべし。
されど益友損友とて。昔の賢人もいましめ給ひ。先
益友とは。貧き人にても。五常正しく。別あるべき人。又家
業に精を入。学問をなげ。道理をたゞし。
勝負事せぬ人也。又損友とは。富貴なりとても。学問
なく五常をたゞしまぬ人。あるべきとぬけ。けがれたる事
人にまさる。傍あるべき人をさげどみ。虚心わるくひがみ
偽りなどして。猶勝負事ばかりする人なり。此両をよく弁知る事。
益友と成べき。損の中にも。善のごとくそのごとく成べ

かるべきものなり

○酒宴用心之事

酒は人をよくして。量をはかるべし。そもそも酒のうるはしき物
なれども。聖人誡めをなし給へり。酒醉狂乱して
のぶべからざる憂をもつくれば。身血をくだいて。学問をも
なげうち。家業長寿をも失ふべきなり。酒もりのうたがひ
なるべきなり。酒もりのうたがひなれば。やがて喧嘩
出来る。其元。耳をかたむけて大事なりとて。無理なる
強をすゝめ。きらひのひと人に強をすゝめ。酒合

結ぶ所の品々、すべて世間の迷惑に及ぶる。高平
世界に拘ることなれども、京にかも角にかも、呑
うれとのまん人の世にて、上方にいうる所来りて、あの
ごとくに、無理にもあるべき事。扨も矣止めるべき分も
命もたまる度ごとに、無理もさして行べきなり。その
度ごとに三度ずつ、物を進ずる事。三度までい
れ義とも、べつのごとくほうこうにもあるい。如く乳也。
扨て仏の法論とて、一度の紙をもて、人に酒と呑
ますものに、百生の間、のかれたものにまるくや、悦
ものとていつもに、百生。蛇蝎や蛇の

ごとくにまたんるに、なるべき事也。扨行て呑人は。
則是ふ大病人にもてなしてどひろかの人を
悪口しつるといひられる。人に行ることれ
大切の家業をこそ。なぐく家内の老ぐく。迷惑
に及ぶべし。貧かさるしい家と考ひ分と云ところ。
皆礼義をわきまえて、それ法をもてぶるゆへ。乗和は
強き人あるべし。所詮よく口きき人もてくるべ
なく。家業ふさいるべ。家のむこそ。
法この酒呑ものべ。ぜひ〇ちくはけ〇こそ用る
べいよに書はの言葉もなるべ〜

○養父母舅姑用心之事

家督の貴婦をうる事は、たゞ我孫をもゆづり、老乃子孫にあらざれば、なさんと志して、縁と求くるの人が、藝才をも問ず、今始をつゝしで、它求る事なれば、法を、今と志切に世すべし。又求る共、新く、新く、必切なる私をも、貴るべしたゞ、新切、孝養につとめべきなり。もろ〳〵小間なる物の、悪く、初より終まで、いろ〳〵指支、そこ〳〵おろかをもれて退出る事い、何ゆへぞ。おやをゝぼつかなしべ子たも、婦も、他より貴てうとく志ひ。

又子も、婦も、他より来るところにて、容儀に入こゝろ、ゆゝしく、親も又、気ふあいざる所いゝ人さんと、実に和合ざるゝ、やうわるる和也。只平をとく合点して、貴ろ所より。ひゞ、有るゝ子たとゝ志ひ。ある共、也ゝ、ゝ仕ると、ゝ、ゝ、ゝ

○養子与娵用心之事

人のこゝに家を興し進退とゝまる程辛労ありて世
たつる仕業をもつぱらとして古切の家財をはつる事ゆく
方ぐさなるべしかゝる家の風俗にうつして家業業
内の姑舅をたゝ切につとめ少も私の心なく終の身まで
そうぐしてあらんにはこの心を持く一ふしをお
もひ定て大切につとむべき物也爰に又母をば公
まんなどにそゝのべうはの新のぢくにうりて折々
うりをゝづれべし扨娵とうる者迎て婦人内とうるて

れこもるものなれば其の風俗をたゞし内の姑舅と分
一ふしてかれ礼節のつとめよい程にもち来れば度こゝろ
なるに祝新の方へも使をとりくれ不孝なべし扨て
家内の事は姑舅いまよりはしてかゝる私のものとせば舅
姑に今日は孝をたくゝ家人に情をかけそはこゝ扨
又孝行を約くいつくれば程の二ちを任実にとる
事也今人べ娵に行ふこれ孝をつゝがなくゝみ
するものこゝろの誉也と思ひて行ふいとけまこゝも産
ることない若ゝれ人くけしく産ゝ事い後こゝろいう
ゆくこゝなりゆく也別をこゝ也を。兎紀舅姑に用ひて陰

紙をもいぶく紙の如くけすべきなり。紙の如く
ひろげ用ひけいせんとぱらぱら反故ゆへ
ゆんかぐ書ふもをとり其所所をと
ひくのごとくにあ紙足事新新までの紙のごとく他へ
てもその不孝の如くいぶくまに入まぢたるをお
もいひろげ能く紙切よはとむべきなり深く臭ないい。
あまりはゆんどくめしべ。也く所ゝきるもの移て子
ども立ぶるまい此如方すべきなり

○老人用心之事

もあまりに作人をのばくなるゆへ。俗諺
ゆつまりて道をいくぐる事まで紙つくるべ。
いくべ見ぐるまきあるべ。移くべ行くべと惜
おべ。もべて老人は若ぶべ人合とるべ。
才一也。加編見れ用ひあるべ。
るべべの男もまれたべ。世のべ。拙業もるべ
べ。若ゝ人出家人すべ見べ。已相無
り人べ。の稼ひかべ移べ。
移れまべ。ぶく紙べ。無のるまべ。
ゆべ。家にもふべ。

うばれて養子に成る。家に
もあらずして居は也。常に無病に成る。冷に成る。強き
物。飽食とぐらしに成る。夜道を行へい。獨行ぐらしに不時
乃怪我有るべいに成る。孫は射しに不孝の名に付る。
をかりしいそれば也。只うるはしけて有る。
書物をあつて使べし。獨有ても。閑寂なるをすぐ
けるべき物也。まことに幸ないに貧乏と結果也。凡
ぐれき物とぞれ。ぐるあるべき幸也。そぐつ移し。
仏事作善。陰徳を不仏とすべし。若財とぐれき
ぶ人いに。我より下れ人をうんぐぐ。秘ないに事也。

よろこびあけしめべきものなり

○多代奉公人用心之事

抱てなにする者いに人いに先に奉公あるのこうのくあ
るべいに。あるべき事にくも。服立うるひるるるものなり。
眼おのこ無用あるをいに付れいるも。先よくみく
をるべに。先に奉公とにて。若る所いに。
用いかいにいに人いにけめこのもにれば用
をにて。人も我も。公のようをつきこれ。
そのまけをいだくみるこのもに。先て有るこのこの。

家祖宮仕出る所なり。親子親類ばかりなり。
法名なと正直に於く。ぜひなき事に成ては
し。侍衆の中なれ。ひが身も怪我のなかれ申す。必
をそ法なくぞうぞうしくいそ
ぬ者もなし。をそれに出る者も多く有る故。
まくまでこそ所の公方を恨しどうてよくつとめる所
はいろうれ人よも。家に入物なるほどよく甚きろ
をこらして。功者ぶりして。関合なきこの式
をろゆへ。久しく居る行。都て侍衆の中もあり。
仕をこれ多く。家に入ぐる事いぐ仕事なれて。

れぐる公出るゆへ也。賢者に。神く有る所の公式をば
勤るゆへ。ぜひに家の風をば。皆侍衆れをもるゆへ。
仕これを主人れ為ふもなり。我身もよく持ものなり。又
忠孝なて。ひろき事に成わるべ。只信の公式なり。
万事を我物の事なり。裏表なく。大切にするゆ也。
ちとしぐ人に仁恵を施して。我る者のごとく。不仕
をくろく。正たくなりの也。もろしぐ信ひろをなて。
家なれに通じて。家も栄さまり。ぜひ身も立る。天道な
通じて。ゆくゆく人いらくなく。所をるるなるべ
ともこの身いぬ。仕合よく福あるこの也。所人い所て。

邪をくるへ利徳を付る事を才一とて必て私の心
をかまへざる故よしなき代といふべし元て本紙まことに
拙才一とん

○道中用心之事

旅立とる出い結束。九尾落るのことく。四方あるを
はべし。よしなき魔。魔物とく。雖を四方背はくよう。
大小をば自分のあやまりにあらるる中しに当中つのをと
べし。むかしの新しきをいとべし。相宿に居ていた
事をと怪なし。ものを人。面をうかく名所名産

を人。より出入法あり。荷物の仕色不法人は用心
ひとしく。おもしろ。記あり。門番をうくる事の也。
〻。当用をいとべ。今おいに先一体とべ。さすれば夜中用
さしるもの也。分俗ア陸ア。ものくば立合よ雅と
もみ毎て重べし。宵の寝あをもうて明べきうつ。家
の門口。大きなる掛あ。掛をうべ。あげ後をうべ。かすい口
方不まあり。むの脇のあ月一法く明べ。地ばて乃中
ていた九寝ときべき也。荷物をば人ちあ中ばうく
解をとれ中に。ぬん法く。細しばるべ合て重く
ち。重ト程の若あるべ。寝間入量べ。拍子定乃

ちごの代のわかれがりを見て面へまてらいへいの角に付番別
自由ようめりのもの扱初ようにけよいあくにんようにつと。三
度喝くらの方のなれやれんべ。扱て初れいくんと。
ねりぐよれたりス馬ようて移ようけつべく腰をとく。
おおの方へはぐりてゆんぐりと面方ようくて番べし。
るはまぐくておりてくあ旅下ぐ〳〵恐怪我をりの也。
馬所てはぐりぬをりてそよ〳〵海の面波川越しは。
ん面よくの持てを書てい字にまぐりの書べ。ん雖
ふありどス加て酔人いの墓の穴へ紙ようとさ〳〵へのくあ
をこをれば忘りどス生ま根ス ねを米にへへのみて

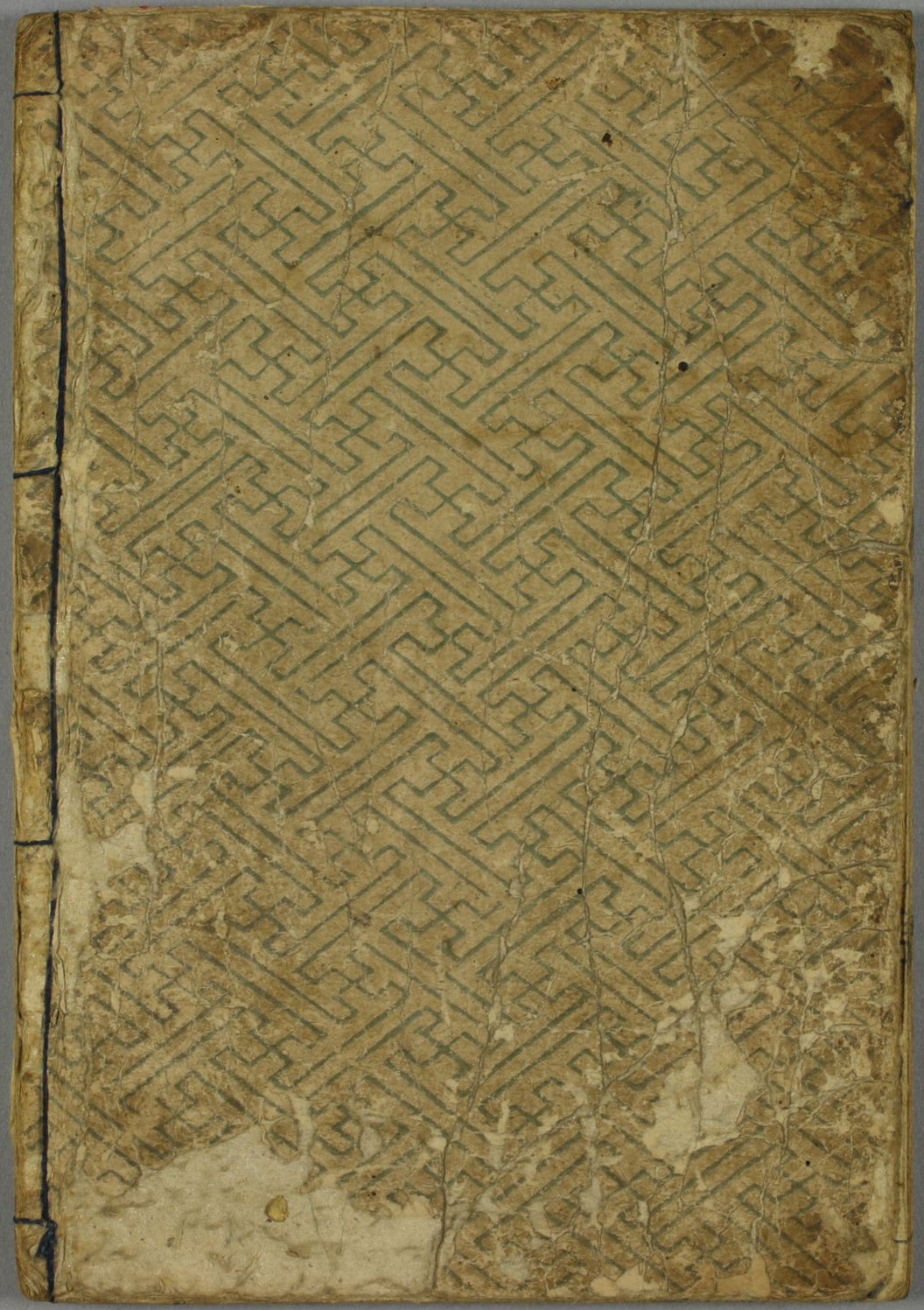
ようとりつス加中へ賊の字にまぐりの書く点と砕
人の家て来て酔どれてあり。扱て移てそいの人の素
をんのまあ扱也我もス人よむさとあるにん扱也。
みく用るかいへれるあるて先我りて入のて。側の人
にんをく用めべ〳〵ようて亀の怪我あれば逆義る面へ
逆面をれだ也ス馬ようてへ酒をのまするるれ
酔とれいぞいのかれ。きう名ゆをいあ也。
歩行て一人移ようるものぞくれ強に袖を入移て
ようぞをしぞ盗賊名ふ亀ようが先屋名人ま
什くようれもの也元てる中へ屋根をとてそれ人ま

沙汰をぶ。ぶ。ぶ。

○人〻讀で益有書物〻大概〻事

一大和俗訓　一家道訓　一農業全書

一救民妙薬　一四言教誨義　一五倫大意読解

一諸士男子訓　一百姓囊　一町人囊

一大和女訓　一女みさご草　一秘事記